

【本文】

次の文章は「源氏物語」夕顔巻の一節である。光源氏は彼が最も信頼する従者・惟光の屋敷を訪れる。惟光の母であり、自分を育ててくれた乳母でもある女が、病が重くて尼になったのを見舞うためである。そこには尼の子どもたちが集っていた。読んで、後の問いに答えよ。

惟光が兄の阿闍梨、婿の三河の守、娘など渡りつどひたるほどに、かくおはしましたるよろこびをまたなきことにかしこまる。尼君も起きあがりて、「をしげなき身なれど、捨てがたく思う給へつることは、ただかく御前にさぶらひ御覧ぜらるることの、変はり侍りなんことをくちをしき思ひ給へ X(たゆたひしかど)、忌むことのしるしによみがへりてなむ。かく渡りおはしますを見給へ侍りぬれば、今なむ阿弥陀ほとけの御光も心きよく待たれ侍るべき」など聞こえて、よわげに泣く。

「日ごろおこたりがたくものせらるるを、やすからず嘆きわたりつるに、かく世を離るるさまにものし給へば、いとあはれにくちをしうなむ。命長くてなほ位高くななど見なし給へ。さてこそ九品の上にもさはりなく生まれ給はめ。この世に少しうみ残るはわろきわざとなむ聞く」など涙ぐみてのたまふ。

かたほなるをだに乳母やうの思ふべき人はあさましう Y(まほにみなす)ものを、ましていと面立たしう、なづさひ仕うまつりけむ身もいたはしう、かたじけなく思ほゆべかめれば、すすろに涙がちなり。子どもはいとみぐるしと思ひて、そむきぬる世の去りがたきやうに、A(みづからひそみ御覧ぜられ給ふ)、とつきしろひ目くはす。

君はいとあはれと思ほして、「Z(いはけなかりけるほど)に、思ふべき人々のうち捨ててものし給ひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひむつぶる筋はまたなくなむ思ほえ【甲】。人となりてのちは限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままにとぶらひまうづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心ぼそくおぼゆるを、B(さらぬ別れはなくもがな)」となむこまやかに語らひ給ひて、おしのごひ給へる袖のにほひも、いと所せきまでかをりみちたるに、げによに思へばおしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子ども、みなうちしほたれけり。

(注) 九品の上一浄土教でいう最上級の極楽浄土。

【問題】

問一 傍線部X～Zの現代語訳として最も適切なもの

X たゆたひしかど

- 1 苦しみました
- 2 ためらいましたが
- 3 心配しましたが
- 4 のんびりしていましたが

Y まほにみなす

- 1 立派なものと思いこむ
- 2 まじめに見直す
- 3 正面からもともに見る
- 4 本当だと思いこむ

Z いはけなかりけるほど

- 1 どうしようもないほど
- 2 記憶にないころ
- 3 思いもおよばないほど
- 4 幼かったころ

問二 傍線部A「みづからひそみ御覧ぜられ給ふ」の解釈として最も適切なもの。

- 1 自分は知らぬ顔をして源氏の君につれないふりを見せなさる。
- 2 自分だけでひっそりと源氏の君を見ていようとしておられる。
- 3 自分から泣き顔をつくって源氏の君に見ていただくとしておられる。
- 4 自分からわざと辛い顔を御覧にいれて源氏の君のお言葉を待っている。

問三 空欄 [甲] に入れる語として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

- 1 けり
- 2 ける
- 3 き
- 4 し

問四 傍線部B「さらぬ別れはなくもがな」は、「世の中にさらぬ別れはなくもがな千代もとなげく人の子のため」(『古今和歌集』、『伊勢物語』)をふまえたものである。解釈として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

- 1 「避けることができない別れ」というものはなくなってほしいものだね。
- 2 「そうあってはならない別れ」というものは無いはずのものですよ。
- 3 「去ることがない別れ」などということは有り得ないはずですからね。
- 4 「さりげない別れ」などということは決して考えてはなりませんよ。

問五 この文章を評したものとして最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

- 1 源氏の来訪に感激していた子どもたちであったが、やがて、尼君の言動に不安を感じてしまう。しかし、それをとりなす源氏のうるわしく立派な姿に接して、改めて感激を深くした。
- 2 源氏の来訪に感激していた子どもたちではあったが、やがて、感激のあまりの尼君の態度に非難の目を向ける。しかし、尼君に対する源氏の心底からの情愛に接して、感動の涙を流した。
- 3 源氏の来訪に驚きを隠せない子どもたちは、源氏に対しても、それに対する尼君についても、どうしていいのかわからない。ただただそのありがたさに感激を深くするほかはなかった。
- 4 源氏の来訪に驚きを隠せない子どもたちは、そのうちに尼君のことばかりから二人の深い関係を知る。自分たちの母が立派な御方の乳母であったことを知り、初めて深く感動の涙を流した。

問六 問四で示した『古今和歌集』の歌「世の中に……」の作者であり、『伊勢物語』の主人公と考えられていた人物名を一つ選び、マークせよ。

- 1 紀貫之
- 2 小野小町
- 3 紀友則

4 在原業平

【解説】

- 問一: X=2、Y=1、Z=4
- 問二: 3
- 問三: 4
- 問四: 1
- 問五: 2
- 問六: 4

【解説・解法のポイント】

問一: 重要単語の判定

中堅私大では、受験基本単語300～600語のレベルから確実に出題される。

- X: たゆたふ

「揺れ動く」が原義だ。ここでは「(生と死の間で)心が定まらない、ためらう」という意味。正解は 2。

- Y: まほなり

「真秀(まほ)なり」、つまり「完璧だ、立派だ」という意味だ。対義語の「かたほなり(不完全だ)」とセットで覚えるのが鉄則。正解は 1。

- Z: いはけなし

「幼い、あどけない」という意味。これは必須単語だ。正解は 4。

問二: 文脈と動詞の解釈

- 「ひそむ(顰む)」は「顔をしかめる、眉をひそめる」という意味だが、ここでは「泣き顔を作る」という文脈だ。

• 尼君は源氏の来訪に感激して泣いている。それを見た子どもたちが「みぐるし(みっともない)」と感じて目配せをしている。この状況から、尼君が(嬉しさのあまり)顔をくしゃくしゃにして泣き、源氏にその姿を見せている状況を指す。正解は 3。

問三: 文法の鉄則(係り結び)

空欄 [甲] の直前に注目せよ。「なむ」がある。

- 「なむ」は強意の係助詞であり、結びは連体形にならない。
- 選択肢の「き(過去の助動詞)」の活用は「せ・○・き・し・しか・○」だ。
- 連体形である「し」を選ぶのが文法上の正解。正解は 4。

問四: 和歌の常識「さらぬ別れ」

- 「さらぬ別れ」は古文における重要熟語で、「死別」を指す。「避ける(去る)ことのできない別れ」ということだ。
- 「もがな」は願望の終助詞(～があればいいなあ、～してほしいものだ)。
- つまり「死別なんてなくなればいいのに」という源氏の優しさを表している。正解は 1。

問五: 内容読解

文章の流れを整理する。

1. 尼君が泣きじゃくる。
2. 子どもたちは、母の態度を「みっともない(みぐるし)」と思い、恥ずかしく感じて目配せ(つきしろふ)をする。
3. しかし、源氏が非常に情深く、また高貴な香りを漂わせて優しく語りかけるのを見て、子どもたちは「母がこれほどの方に仕えていたのか」と感動し、自分たちも涙を流す。

この変化を正確に捉えているのは 2 である。

問六: 文学史

- 『伊勢物語』の主人公と目され、『古今和歌集』の代表的歌人、六歌仙の一人といえば在原業平だ。これはサービス問題であり、落としてはいけない。正解は 4。

【現代語訳】

惟光の屋敷への来訪

惟光(これみつ)の兄である阿闍梨(あざり)、婿の三河の守、娘などが集まっていたところに、このように(源氏の君が)お越しになったお喜びを、またとないこととして恐縮している。

尼君も起き上がって、「惜しむほどでもない(卑賤な)身ではございますが、捨てがたく(死にきれず)思っておりましたことは、ただこのように御前にお仕えて(あなたを)拝見することが、変わって(できなくなって)しまうだろうことを残念に思い、(生と死の間で)ためらっておりましたが、(出家という)忌み慎むことの効験(しるし)によって生き返りました。このように(あなたが)お越しくださるのを拝見できましたので、今はもう、阿弥陀仏のお迎えの光も清らかな心で待つことができそうです」などと申し上げて、弱々しく泣く。

源氏の返答

「日頃、(病気が)治らずにいらっしゃるのを、不安に思い嘆き続けてきましたが、このように俗世を離れた(出家した)姿になられたのは、たいそうしみじみと残念に思います。寿命を長く保って、さらに(私の)位が高くなるのを見届けてください。そうしてこそ、(極楽浄土の)九品の上という最高ランクにも、障りなくお生まれになれるでしょう。この世に少しでも未練が残るのは良くないことだと聞いています」などと、涙ぐんでおっしゃる。

子どもたちの反応

不完全な(出来の悪い)子でさえ、乳母のような立場の人は(わが子のことを)立派なものと思い込むものだが、ましてや(源氏のように)たいそう晴れがましく(立派で)、お側でお仕えてきた身としても(源氏のことが)いたわしく、もったいなく思われるに違いないので、(尼君は)むやみに涙がちになる。

(尼君の)子どもたちは、たいそう見苦しいと思って、出家して捨てたはずの俗世(への未練)を去りがたい様子で、自分から泣き顔を作って(源氏に)お見せになっている、と(母親を苦々しく思い)小突き合って目配せをする。

別れを惜しむ源氏と、感動する一同

源氏の君は、たいそうしみじみと愛おしくお思いになって、「幼かったころに、親しく思うべき人々が(私を)捨てて亡くなってしまった後、育てる人は大勢いたようでしたが、親しく親しむ縁(ゆかり)は(あなた以外に)またとなく思われました。成人してからは限度があるので、朝夕にお会いすることはできず、思うままにお見舞いに参ることはありませんが、やはり長い間お会いしない時は心細く思われるので、(死別という)避けられない別れは、なければよいのに」と、心を込めて親密に語り合いなさって、(涙を)お拭いになった袖の(焚きしめられた)香りが、たいそうその場に溢れるほどに香っているので、本当に、世間一般の普通の人ではない(高貴な)方の前世からのご宿縁なのだなあ、と、尼君を(母の振る舞いとして)苦々しく見ていた子どもたちも、皆(感動して)涙を流すのであった。